

第 17 章 『三十六』と『九十六』の聖数融合

本通りにおいて展開された二つの寄進奉納事業の中に出現する（採用された）『三十六』と『九十六』の数字（聖数）に係る意味合いについて考察する。

1. 事業内容

✓ 1；奥州平泉藤原三代秀衡公御前様（奥方）の寄進

西川町史編集資料第六号（志津文書）P20 より図(表)－1 に取り上げる。

「・・・ 一、高清水旧跡之事、昔奥州秀衡公之奥方為_レ御参詣_ハ 月山之獄下迄自ら運歩彼_レ為_レ成候_ハ申伝候。其印ニ_ニ仙_ニ台_ニ塩_ニ釜_ニ六_ニ所_ニ明神_ニ之御神_ニ鉢_ニ金佛_ニ御_ニ鑄_ニ立、高清水の路_ニ辺_ニニ_ニ彼_ニ六_ニ所_ニヲ_ニ方_ニ取、一_ニヶ_ニ所_ニニ_ニ六_ニ鉢_ニ宛_ニ三_ニ十_ニ六_ニ鉢_ニ六_ニヶ_ニ所_ニニ_ニ立_ニ彼_ニ置_ニ候。・・・」

・その置いた場所は6 個所あって、各所に6 体ずつを安置したことは、 $6 \times 6 = 36$ の数理関係にある。

・「三十六」は「三と六、^{みろく}三六」「^{三六}みろく」、^{三六九}弥勒菩薩の「^{三六}弥勒」なのである。

・語呂合わせではあろうが、いや、たまたま、語呂合わせに叶うことになったが、後述するとおりに聖数として論理的意味合いを有するという。

図(表)－1

奥州藤原三代秀衡公御前様（奥方）が、本通りに「**三十六**」体の銅像・金佛を寄進・奉納した。その三十六を構成する数字の組み合わせでは、 $36 = 1 \times 36$ 、 2×18 、 3×12 、 4×9 、 6×6 もある中で、なぜ 6×6 なのか、すなわち、六個所に、かつ 1 個所当たり六体を安置（配置）することにした理由は何か、この「**六－六－三十六**」に隠した・託した意味があったはずだ。果たして、「 $6 \times 6 = 三十六$ 」の意義は何か、その根拠は何に依拠しているのだろうか？

なお、現在の鹽竈神社HPには由緒には明確に出て来ないが、他所においては、「奥州塩竈六所大明神」を勧請したという神社は相応数がある。

✓ 2；高清水通りの入り口「口之宮湯殿山神社（旧本道寺）」境内東北地に存置する「文政五年基点記念碑」に刻された「従是高清水迄九十六丁處」とそのとおりの「九十六丁」（石）の現存を踏まえて、達磨寺村の人達を中心に、本通りに「九十六」体の丁石を寄進・奉納した。98 丁（体）にせず、100 丁（体）にせず、108 丁（体）にせず、なぜ九十六丁（体）なのか、その理由は何か。この「**九十六**」に隠した・託した意味があったはずだ。

2. 基本の予備知識

次に展開する前に参考に資する基本的なことを抑えておく。

(1) 中国往古よりの宇宙創成原理（数理性自然法則）／図(表)－2

前記それらを解明するためには、数理を抑える必要がある。数理については、前出書籍の他にも、そして、インターネット上には数多の解説が記載されているが、本件に関係ありそうなものを選出して列挙する。その前に、数理に係る代表的な中国古典を取り上げる。陰陽五行説、老子（道教）、それらを複合・大成した易経^{えききょう}の思想・哲学が基層にあることに留意する。特に易は、大自然界の森羅万象を数理に還元

し、統一的原理を追及する思想・哲学である。以下、これらを簡略的に中国古典と称することにする。つまり、本件命題である、『九十六（9・6）』の数理の意味合いを探るに当っては、中国古典の初歩——陰陽五行説、老子（道教）、易経を心得ておく必要があると考える。

老子には、「道は一に始まるも、一にしては生ぜず。故に分かれて陰陽と為り、陰陽和合して万物を生ず。故に曰く、一（一）は二（陰陽）を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。万物は陰気を背負い陽気を胸に抱き、この二つを媒介する沖気によって調和を為している。」の記述がある。

「[天地の万物・森羅万象]が自然数的に徐々に増加して行くイメージが湧く。」

易経には、「易に太極（一）あり、これ両儀（二）を生ず。両儀は四象を生じ、四象は八卦（八）を生ずる。」の記述がある。

「[徹底した二累法になっており、2の累乗で爆発的に増加して行くイメージが湧く。]

数理キーワードの簡単説明は次のとおり。

- ・『一』または『太極』は、万物未発未分の状態、すなわち、宇宙創成の初源で何もかもが“一つ（全一的）”になっている混沌・混然一体の状態をいう。「無分節・平等相・無分別智界」を象徴する。
- ・『二』または『両儀』は、分れた最小単位陰陽二元をいう。相對(待)性原理の種子、森羅万象の胎動基点を意味する。また、「分節・差別相・分別知界」を象徴する。
- ・『三』は、森羅万象の躍動・分化発展の（万物を生む）基点をいう。および、空間的『天地人』の『三』、時間的「過去・現在・未来」の『三』、三界「欲・色・無色」の意味も有する。
- ・老子に四は記述されないが、三が万物を生む基点であるから、最初に生まれた万物は四となる。易経に三は記述されず『四象』の四に飛ぶが、累乗性の性格を与えたが故には、三は隠しているに過ぎない、空間軸の四方、時間軸の四季・四時と照応する。

「[両者に共通するものは、『一』と『二』、それぞれから固有値を抽出すると『三』と『四』と見る。
($2 \times 3 = 6 \dots 9 \text{の} 6$ 、 $2 \times 4 = 8 \dots 4 \text{の} 8$)]

図(表)－2

(2) 数の分類に二通り

原始において、数を数えるにはまず片手の五指であった。図(表)－3・4のとおり、自然界数起源の生数と、それを元に生み出された成数の見方で2分類する。

- ※1；平数は真ん中、懸け橋、接着剤、仲介役の意をいう。公平・平等に作用するという役割を担う。
- ※2；成数は、生数に、天地に共通な「平数5」を加えたもの。逆に、成数から「平数5」を差し引くと生数に戻る。
- ※3；2桁以上は整数第1位の数字のみに着目することとし、それ以外の10の整数倍を溢数として扱う、すなわち無視して扱うこともある。例えば56は6と見做す。
- ※4・5；体と用は本体とその作用、あるいは本質とその現象をいう。
- ※6～8；整理・仕訳に二通りある。

例えば、数「1」は、片や陰（生数）で、片や陽（天数・奇数）で矛盾するではないかという見方になるが、陰陽二元の現実世界においては、これは矛盾ではなく、当たり前のことなのだ。「陰中陽あり・陽中陰あり」の表し方の一面である。（矛盾とする主張は思考が偏っている一旦の露呈）

生数	※1 (平数)	※2 成数	(平数)	(※3)	天数 (奇数)	地数 (偶数)
1	(+5)	6	(+5)	11	1	2
2	(+5)	7	(+5)	12	3	4
3	(+5)	8	(+5)	13	5	6
4	(+5)	9	(+5)	14	7	8
5	(+5)	10	(+5)	15	9	10※3
陰		陽			陽	陰
図(表)－3 a					図(表)－3 b※8	

(※4 左手・原因 体)	しょうすう 生数 (※6 天数・陽) 生まれたままの動かぬ数 [静的]	陽・奇	陰・偶	陽・奇	陰・偶	陽・奇	計
		1	2	3	4	5	15
縁	(懸け橋・接着剤、平数)	5	5	5	5	5	
(※5 右手・結果 用)	せいすう 成数 (※7 地数・陰) 5を得て変化躍動する数 [動的]	6	7	8	9	10	40
		陰・偶	陽・奇	陰・偶	陽・奇	陰・偶	55
図(表)－4							

(3)『六（6）』を聖数とする意義

○1；前記図(表)－2中の「一・二・三」の自然数に対する基本演算「加算・乗算」を操作すると図(表)－5のとおりの「6」になる、6は最初の完全数（自分以外の正の約数の総和が自分自身に一致する数）であり、3×2×1は3の階乗（3!）である。よってこの6にフォーカスした。

加 算	1 + 2 + 3 = 6 = 1 + 2 + 3	中央の2が共通し、左右両端で1と3が共通する。
乗算1	1 × 2 × 3 = 6 = 1 × 2 × 3	
乗算2	6 = 2 × 3 = 6	○ 上の自然数の加算・乗算で左端の1（未発・混沌）を除く2（陰陽二元）と、3（躍動基点）の乗算となる。 ○ 自然数最初の偶数2（陰）と、1を除く最初の奇数3（陽）の積である。
図(表)－5		

○2；原初の空間意識、東西南北の4方に、上下を代表する天地の2方を加えた6方の6である。物体の位置や動きを定義する空間規定の3方向、東西2（X軸上）＋南北2（Y軸上）＋天地2（Z軸上）＝向い合う空間壁2（相対の陰陽二元）×3（組み）＝6であり、この6にフォーカスした。

○3 地球創成時の蠢きについては「天地人」三才と陰陽二元が交渉し、万物万象が生み出されるという考え方があって、2つの切り口がある、結果は同じ。なお、才とは「はじめ」あるいは「はたらき」の意味合いを持つ。

一つ目は、はじめ（始め・初め）に陰陽二元（2）があって、それぞれに天地人（3）が作用した。すなわち、 $2 \times 3 = 6$ 。

二つ目は、はじめ（始め・初め）に天地人（3）があって、それぞれに陰陽（2）が作用した。すなわち、 $3 \times 2 = 6$ 。

結果は同じものの6場面から多へと展開して行ったことを踏まえて6にフォーカス・抽出した。

○4；六根の6に着目する。六根とは、仏教でいう「眼・耳・鼻・舌・身・意」の6つの感覚器官とその感じる力（作用）をいう、その感覚能力で得た識が悩みや迷い、苦しみの誘発材（器官）となる。行者・道者は山道においては、「懺悔懺悔^{さんげさんげ}六根清浄」あるいは「慚愧懺悔^{ざんぎざんげ}六根罪障」と唱えながら奮い立って聖地・秘所・御宝前を目指した、清浄行の象徴として6にフォーカスした。

○5；測量技術の基本となる3角形の三は図(表)－2中の万物躍動基点の三である。整数だけによる3平方の定理 ($a^2 + b^2 = c^2$) ——測量技術の基本公式の一つが成立する3辺比のグループを“ピタゴラス数”といい、最小数の組み合わせは「3・4・5」の直角3角形である。その面積は6 ($3 \times 4 \div 2$) であり、周囲長12 ($3 + 4 + 5$) の半分6に一致する、数多あるピタゴラス数の中で「面積＝周囲長÷2」となるのはこの組合せだけであることから6にフォーカスした。

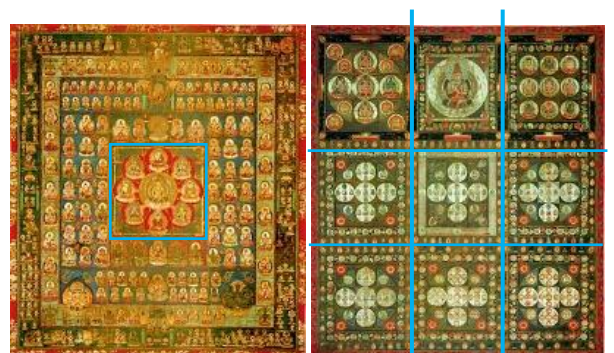
(4)『九(9)』を聖数とする意義

○1；9は、天数、陽数（奇数）、成数の究極の数であり、聖数そのものであることから9にフォーカス抽出した。（なお、10は溢数10を払うと0となり無視する。）

○2；老子「一は二（陰陽）を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず」の三つの原初的聖数に加算（老子性）と累乗（易性）の操作を与えると「 $1^3 + 2^3 = 9$ 」となることから、9にフォーカス・抽出した。

○3；空間構造において、東西南北の4方位、北東・南東・南西・北西の4隅の計8方位に、中央を加えた9方位の9にフォーカスした。

○4；図－6はネット『ウィキペディア (Wikipedia)』より拝借・引用した。密教も関係している。図－6a 胎藏界曼荼羅は、大日如来1尊を中心に置き、広がる8枚の蓮の花弁に四如来と四菩薩に配置した仏（中台八葉院）の9尊で構成する。なお、中台八葉院（蓮の花弁8枚状）の8は空間構造8方位の8がモチーフとなっている。図－6b 金剛界曼荼羅は、会と呼ばれる9区画に仏を配置・構成する。曼荼羅はこのように、金胎両界の一对を以ってこそその有意義で、9尊と9区画に共通する9にフォーカスした。



図－6a

図－6b

(5)「6と9・9と6」の合わせ技の意義

それでは、なぜ、「9と6（6と9）」なのか？ 諸説考えられるが、前記を踏まえて、以下、主なものを列挙する。再度、前記図(表)－3・4を参照する。

○1；生^{しょうすう}数に着目する。1，2，3，4，5の中で、陽の奇数を合計すると、 $1 + 3 + 5 = 9$ になり、陽の長じた数字と見做す。また、陰の偶数を合計すると、 $2 + 4 = 6$ となり、陰の長じた数字と見做す。陽の長と陰の長を並立すると「9 6」となり、陰陽調和の印として誠に縁起の良い組合せとなることから、よって、9と6にフォーカスした。

○2；成^{せいすう}数に着目する。6は成数の初めの数で偶数は陰、9は成数の終りで奇数は陽である。初めと終り、偶数と奇数、陰と陽、見事に相対調和が取れている。6は陰中の極数となる。（陰は偶数の6と8の二つであるが、陰はマイナス・負の領域で見る必要があり、絶対値の小さな方が実質は大きくなる。） また、9は陽中の極数となる。よって、9と6にフォーカスした。

○3；易経に基づくもう一つの見方がある。図(表)－7のとおり、9は最も大きい数、かつ奇数なので『老陽』とする。次に老陽対極の老陰を決めたいが、陰を示す偶数の中で最も大きい8を『老陰』とすべきではなかろうかと思うのは当然のこと。しかし、『老陰』は6とする。その理由は、易経においては、陽と陰では全く背反する性状を問題視することから、陽は進み、陰は退くという絶対定義があって、陽は7から9へ前進する、陰は8から6へ後退するとして設定する。また、このような状況において、6・9は動数で、7・8は静^{すう}数と見る。よって、動を象徴する数理において、6を陰の極数（老陰）とし、9を陽の極数（老陽）と設定する。このように、易経の数理においては、陰の極数、すなわち陰の代名詞を6とし、陽の極数、すなわち陽の代名詞を9としていることから9と6にフォーカスした。繰り返すが、陰の極数は8ではない処^{N o n}が肝である。

6 ↑	7	8	9 ↓
(動数)	(静数)	(静数)	(動数)
老陰	小陽	小陰	老陽
[四 象]			
図(表)－7			

○4；6と9に対して、数理における四つの基本操作で刺激すると図(表)－8のとおりとなる。この二つは絡み合って、どんな外部刺激を与えても形は変えるが原初の価値・内実是不変なことから、よって9と6にフォーカスした。

大 だい 化 いか 操作	(加)	6 + 9 = 1 5	(並び数の和) 1 + 5 = 6	6 と 9 ⇒96 (逆並べ)	96 ∨ 69 ∨ 36
	(乗)	6̇ × 9̇ = 5 4	(並び数の和) 5 + 4 = 9		
	小を大で操作 (価値の増化)		(上下の和) ↓ ↓ ↓		
			6 と 9 で 15		
図(表)－ 8 a					

小化操作 しょうか	(減)	$9 - 6 = 3$	$3 \times 2 = 6$	(6+3=9) [3・6・9]	6 と 3 ⇒36	96 ∨ 63 ∨
	(除)	$9 \div 6 = 1.5$	$1.5 \times 2 = 3$		(逆並べ)	
	大を小で操作 (価値の減除法)		陰陽二元の 2 で復元化		――	
図(表)－8b						

○5；宇宙の三要素たる天地人は3、最初の偶数（陰）は2、最初の奇数（陽）は3である。1は数学的には奇数であるが、太極相応（根本原理・絶対基準）であるから省く。3（天地人） $\times 2 = 6$ 、3（天地人） $\times 3 = 9$ であり、老陽、老陰に照応させて、9と6にフォーカス・抽出した。また、数字の大小の並びとしては、 $6 < 9$ であるが、逆修（預修）^{ぎやくしゆ よしゆ}の考え方——逆も真なり！を以って、順序入れ替えにより、9と6にフォーカス・抽出した。

○6；天数と地数に焦点する。1は太極相応（根本原理・絶対基準）であるから省いて、天の数は3から始まり、地の数は2から始まる。純陽の乾卦三は3陽にして、陽の数3（天数・奇数）を3倍すると9となり、純陰の坤卦三は3陰にして、陰の数2（地数・偶数）を3倍すると6になる。ある対象（3と2）に同じ3交^{こう}を乗じて9と6が表れることから9と6にフォーカス・抽出した。

○7；図-9（ネット、Written by わかまつなおき より）を参照のこと。1から9までの数を1回ずつ使う $3 \times 3 = 9$ 個の魔方陣は——縦・横・斜めのいずれの列についても3つの数字の和が15となる、この時の左右両側の数値並びを足すと $1 + 5 = 6$ 、また、中身を解くと $9 + 6 = 15$ ——を構成する。この枠に9星を配置して、陰・陽二元、五行（木・火・土・金・水）、十干（甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸）、十二支（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）を絡めて運勢や方位の吉凶占いに活用する。また、 3×3 の3は乾坤（陰陽）各3交^{こう}の3であり、かつ、 $3 + 3 = 6$ であることから9と6にフォーカス・抽出した。

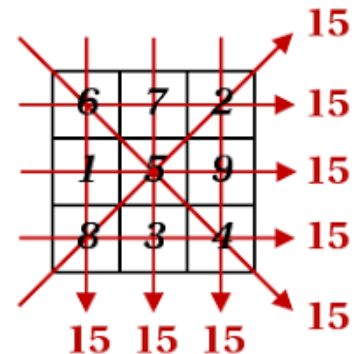


図-9

○8；「6×9」はSix（シックス）・Nine（ナイン）という。陰陽二元（男女）の絡み合い・噛み合いを重ねる。分別知の基点陰陽二元を図式化した陰陽魚眼太極図（図-10a）は、6と9を模した勾玉が二つ噛み合った形（図-10b）と相似形になる。図-10cのとおり6を左右反転さらに上下反転すると、つまり、6に上下線左右線のクロス（十字交差）操作を与えると9になる。



図-10a



図-10b

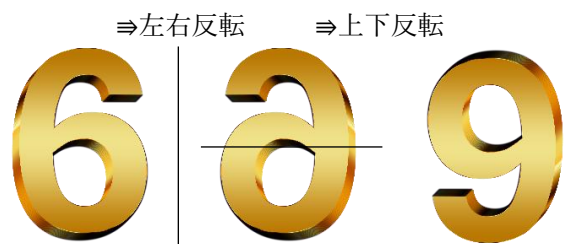


図-10c

○9；6と9を上下に重ねると、図-11のように、8（八）にもなり、横にすれば——西洋的に無限大記号にもなる。日本では——東洋的には八は末広がりとなり、無限大記号と同義となる。また、8は9から6を差引いた3を向い合せて成ることからは、誠に縁起の良い数字なのだ。

○10；加減乗除に共通的に表れる¹は太一（太極）の意、³は万物を生むの『三』および『天地人』の『三』の意、⁵はへい数（真ん中、接着剤、仲介役）の意をいう。こう見ると、6と9に対して、数理における四つの基本操作で刺激するとこの3要素が表出する。なお、2は対極にある陰陽二元に対応するが、相違するもの、相対(待)関係にあるものの表現にも意図する。このような関係に表れる数字の組み合わせは他にもあるだろうか。本当は数学を駆使すれば有無を証明出来るはずであるが、当方の頭脳は着いて行けない。したがって、そのような6と9の相性に魔物性・神秘性を感じて、9と6にフォーカス・抽出した。

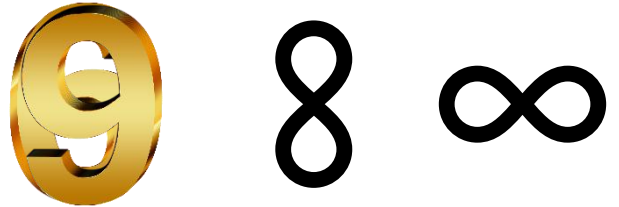


図-11

○11；その他。図-11にも見られるように6と9の形をそのまま水平にスライドすると、凹凸の合体となる。凹凸はすなわち陰陽・男女の合体と直接結び付く。まさに、子孫繁栄・五穀豊穰に直結する。それ故に、前段の数理解析に関係なく、深読みせずに直感的に「九十六」丁としたのかもしれないが。

3. 『三十六』の根拠

以下は推理・想像・創造である。

（1）密教の金剛頂経に表れる「三十六」と「三十七」

本通り基点は、古来、「旧月光山本道寺（現 口之宮湯殿山神社）」であり、大日如来を本尊として空海（弘法大師）が開基した。言うまでもなく空海は大日経と金剛頂経を根本経典として日本版密教を完成させた。その金剛頂経の「略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門」（金剛頂瑜伽）に図(表)-12のとおりの一説がある。（ネットサイト「日本仏教学院 HP」等を参考）

自性及び受用と変化ならびに等流と、仏徳の三十六は皆自性身に同ず。法界身をあわせて総じて三十七を成ずるなり。

（漢文：自性及受用變化并等流 佛徳^三十六皆同自性身 并法界身總成^三十七也）

（解説）

これらの「法界身」が大日如来のことで、「法界」とは、大宇宙のことですから、大日如来は、大宇宙そのもので、他の諸仏菩薩の中心と言われたりします。大日如来が最高仏だという人は、実はこれらを根拠にしているのです。

図(表)-12

「佛徳三十六」は仏教徒としての修行体系の一環を為す三十六の徳目を列挙したもの。「成三十七也」は金剛界如来となった金剛界三十七尊のことで、内訳は金剛五仏（4仏+大日如来1仏）、四波羅蜜、十六大菩薩、八供養菩薩、四摂菩薩である。

$5 + 4 + 16 + 8 + 4 = 37$ = 「36 + 1（大日如来）」となり、大日如来自体を除くと36仏であり、すなわち、36徳目は大日如来を除く36尊に課した修行徳目なのだ。換言すれば、36尊は大日如来の薫陶

を受けた弟子、あるいは、大日如来は自ら三十六尊に変現展開するとも解釈出来る。(36+1=37、37-1=36、1は大日如来)

よって、金剛頂経に係るこの段は**36(三十六)が肝**である。なお、後記するが37も関係して来る。

(2) 直覚・直観する**弥勒仏**の世界と係る数理の読み解き

「**三十六**」は「三と六」の並立から成り、読みは「三(み)」と「六(ろく)」となる。

また、「みろく」は、読み(発音)と精神世界からの「弥勒(みろく)」、「弥勒菩薩」に重なる、繋がる、敷衍化する。弥勒信仰と表裏一体の関係が見えて来る。弥勒菩薩は12年後に如来となり、**56億7千万年後にこの世に下生する**、すると、「5・6・7」に「みろく(弥勒)」が隠されていると透視出来る、よって、「5・^み6・^ろ7」と置き換わる。さらに、「みろく」は「み(三)・ろ(六)・く(九)=三・六・九(3・6・9)」ともなる。はたまた「みろく」は「みっつのろく」、すなわち「6・6・6」に繋がる。

これらのキーワードの相関に、

「弘法大師(空海) ∞ 弥勒菩薩 ∞ 三十六(36) ∞ 369・567・666」という同相同価の関係性が成立していると観えて来る。

a. 2桁『三十六』(36)に対するアプローチ

□1 ; 36 = 6 × 6

6の相乗効果の発揮を意味する。6は^(陽)成数かつ^(陰)偶数であるがその相乗を以って二つの見方が出来る。陽と陰は相対(待)するから増々その活動活発化を暗示せしめる意味合いを含む。また、陽と陰は相対(待)の引合いを以って中和・中正化し、中道正観を暗示せしめる意味合いをも含む。どちらに解しても縁起が良いものとなる。

□2 ; 36 = 12 × 3 = 18 × 2

12は二つの意味合いがある。

✓ 1年は12か月の月数のこと

✓ 時刻や方角を表す時に用いて来た十二支(子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥)のこと。

次に12に『0』という数字一つを絡めて(増やし)0~12(13種)の数字に着目する。

✓ 『0』は純粋な数理上の無・空という基点である。

✓ 『一』は図(表)-2における思想哲学上の未発・混沌の無・空という基点である。

1年の中間月であり、かつ、図(表)-5等の性質を有する「6」を仲介として、「0~12」を行きと帰りに反転させて加算すると図(表)-13のとおり、全ての各項に等しく「18」が表れた。数字並び「1と8の加算は9」となる。この18には奥まった意味がありそうだが後述する。

行きと帰りの意は、行って来い・行って来るの往復、つまり、円環運動の大事さを重ね、一方向・片側方向の行き止まりを戒める意図である。

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18
図(表)－13												

数理上は「 $36=12 \times 3$ 、あるいは、 $36=18 \times 2$ 」となるが、命題なる 36 を図(表)－2 の万物躍動基点 3 で分解すると 12 になり、一つ手前の万物生成基点 2 で分解すると 18 になったのだ。

□ 3 ; ここで図(表)－12 中の「36 と 37」の数理特性を探る。今命題の「36」について、1 から 36 までの数字に、前記同様の意味合いで 0 を加えて 37 個 (0～36) 個を順次加算すると次のようになる。

$$\begin{aligned}
 (0) + 1 + 2 + 3 + \dots + (n-1) + n &= \frac{1}{2}n(n+1) = 0 + 1 + 2 + 3 + \dots + 35 + 36 = \frac{1}{2} \times 36 \times (36+1) \\
 &= \frac{1}{2} \times 36 \times 37 \\
 &= \frac{1}{2} (36 \times 37) = \frac{1}{2} \times (1332) = 666 \\
 &= \left(\frac{1}{2} \times 36\right) \times 37 = 18 \times 37 = 666
 \end{aligned}$$

- 前記図(表)－5 とおりの強力な霊聖力を持つ「6」が 3 個並び、「み・ろ・く」が出現した。6 に前記図(表)－2 中「万物躍動基点」の 3 が作動したのである。 $(6 \cdot 6 \cdot 6 \Rightarrow 6+6+6=18)$
- 除の「2」は平均したことを意味する。「1332」を陰陽二元の 2 で除したということは、すなわち、中和・中性を求めたということ。
- 合計値 1332 は前記図(表)－2 中の三種類 (1、2、3) の基点で構成され、並び数字を加算すると、9 $(1+3+3+2)$ となる。
- 前記図(表)－12 のとおり密教金剛界で説く大日如来 1 尊と弟子 36 尊の計 37 尊の物語と、
「^{みろく}666・弥勒」の世界が同相同価となって出現したことになる。日本版密教の弘法大師こと空海の弥勒菩薩のとおりとなる。日本版密教≡弘法大師こと空海≡弥勒菩薩にも書き換えられる。

b. 「み・ろ・く」3 桁に対するアプローチ

ここで、前記「みろく」(3 文字) から表出した 3 桁数値「^①3 6 9」「^②5 6 7」「^③6 6 6」を降順に並べて中身の数字構成を整理すると図(表)－14 のとおりになる。3 桁の理由は発展性の意味合いに鑑みて図(表)－1 中の「三は万物を生ず」を絡めたものである。

(ア)

- 1 ; 「6」を共通とし、左右端の数字間上下差異を見ると絶対値「1、2、3」が表れるが、これは、図(表) 2 の宇宙創成原理に登場する数値「一、二、三」と一致する。
- 2 ; 両端上下差異 (+3) と (−3) の合成は「0」(皆無) に帰する。「不生不滅 不垢不浄 不増不減」に繋がる。

(イ)

- 3 ; それぞれの三つの横並び数の合計は等しく「18」となる、ここにも「18」が出た。その1と8の計は「9」となる。
- 4 ; 数字並び横計の総数は「54」となり、縦計の総数も等しく「54」となる。その5と4の計は「9」となる。
- 5 ; 三つの数字(14、18、22)において中の18を除く両端14と22の和は36となり、「三十六」体に等しくなった。縦筋において対する横筋の影響(18)を省いたのだ。

(A)							(B)			
「3・6・9」をベースに左右端の上下数字差異							数字を加算			
上下		6	6	6	上下		6	6	6	=18
↑+ 3	↑+ 1				↑- 1	↑- 3				
		5	6	7			5	6	7	=18
	↑+ 2				↑- 2					
(6-3=+3)		3	6	9	(6-9=-3)		3	6	9	=18
							14	18	22	54
(+ 3) と (- 3) の合成で「 0 」							↙	36	↘	

図(表)－14

c. 煩悩(108根)減滅・滅尽菩薩行への発展性

煩悩108根を3(躍動基点)で除すると、 $108 \div 3 = 36$ となる。躍動基点の3で除するとは復元操作で煩悩を割る・粉碎・稀釈するという意味合いで、日々の清浄行の実践を仮託したものである。

参考に『108』の意味合いは諸説あるが簡潔に整理して見る。

- 1 ; 六根(6) × 好・悪・平(3) × 浄・染(2) × 過去・現在・未来(3) = 108 になる説。

六根とは人に感覚を生じさせ、迷いを与えるもののことで、眼、耳、鼻、舌、身、意の六つを指す。好・悪・平(3)は人間の感情のあり方、好=快感、悪=不快、平=どちらでもないことを指す。浄・染(2)は浄=きれい、染=きたないことを指す。そして三世(3)は、過去・現在・未来や前世・今世・来世を表す。

- 2 ; 四苦八苦の四苦($4 \times 9 = 36$)と八苦($8 \times 9 = 72$)を足した数が108になることからの説。

- 3 ; 気候や季節の変わり目を表す暦に由来し、月の数(12) + 二十四節気(24) + 七十二候(72)を足して108になることからの説。

4. 『九十六』の根拠

以下は推理・想像・創造である。

(1) 結論は、『九十六』 = 『四十八』 × 『二』

a. 『四十八』の根拠

✓ 1；阿弥陀如来の『^{本願}四十八誓願』の四十八である。

阿弥陀如来と極楽浄土の世界を説いた浄土経典三部経の中の一つ無量寿経を典拠とし、仏に成るために修行中の身である法蔵菩薩が、その修行に先立ち「四十八」利他の大願（誓願）を立て、実践・修行・成就を以って叶えたことで悟りを開き阿弥陀如来（無量寿仏）となったことに由来する。

そもそも、なぜ「阿弥陀如来」なのか？ 第15・16章に記述のとおりで、①月山の本地仏は「阿弥陀如来」であり、かつ、②その月山には、その南半分の建物を占有し同寺別当を置いたこと、かつ、③旧本道寺を基点とする「高清水通り」は同寺から月山まででの道であったこと、かつ、④密教においては阿弥陀如来は「大日如来」（＝湯殿山の神格化）と団体であることを踏まえたものである。

✓ 2；「四十八」そのものの根拠

「四十八誓願」の「四十八」そのものの根拠は明確ではないが、次の2点に依拠したはずだ。

- ・ 「四方八方」の四と八。東・西・南・北の四方と、これに北東・北西・南東・南西の四つを加えた八つの方角を指す、直接的には全ての方向という意味ではあるが、あらゆる策や手段を尽くすこと、平等公平に気配り・目配りすることを強調する時に使う。一方的な視線（こちらからあちら）だけではだめで、「四方八方」を見渡すという立体観の醸成を促すこと、「四方八方」からの恩恵に浴していること（あちらからこちら）に対する感謝の念を忘れてはならないとする意味を込めたもの。
- ・ 「四苦八苦」の四と八。「四苦」は生・老・病・死の四つの苦しみ。さらに愛別離苦（愛するものと別れる苦しみ）・^{おんぞう え く}怨憎会苦（憎むものと出会う苦しみ）・^{ぐ ふ とく く}求不得苦（求めても得られない苦しみ）・^{ご おんじょう く}五陰盛苦（心身の苦痛）の四苦を加えた全八苦をいう。ありとあらゆる苦しみのことだが、「四苦八苦」は逃れられないと嘆く（あちらからこちらへ受動的）だけではだめで、だったら、真正面から向き合って一つの楽しみとする（こちらからこちらへ能動的）くらいの余裕を持たなければならないとする意味を込めたもの。

b. 「二」の根拠

端的には、根源は人間の基層・無意識層に流れる自然原理は陰陽二元の二であると直覚する。

（a）観念的な面

一言で言えば、「もの・こと」に対する「両眼照射による両極二重認知」の意識することをいう。もっと単純化すると「複眼思考」の象徴、「もの・こと」は複眼思考で観よ！ということ。

✓ 1 「もの・こと」に対する両眼照射の『二』である。

✓ 2 「もの・こと」を両極・対極の同時成立・二重写しで認識することの『二』である。

結局は眼光紙背力や直観力を磨く――真理（心理）を見抜く力の養生・人間清浄行の構図でもあり、そのためには如何に本当の「自由」を獲得するのかという命題を与えたものであろう。自席・今の立位置における「もの・こと」に対する認識を自覚し、その上でそこに留まることなく、あえて対極する思惟対象を立てる。思惟・思索がその対象両極を二重写しで観えるまで修練が必要である。抽象的になるが、「も

の・こと」に対する調和思考を強調する意図があり、両眼照射とは弘法大師こと空海のいう「中道正^{しょう}観^{かん}」探求姿勢と、係^{かか}る心・言・行をいう。「中道正観^{しょうかん}」とは「もの・こと」において、左右・上下・前後の境界・分別や色分けが無い真の中正点・中性支持点・重心点を認識しようとする思想のことである、逆に境界や色分けが無い世界を認識するためには、左右・上下・前後の対極・両極、両面・表裏が見えてこそ、それを了解してこそそのものだねとなる。例えば「中正（中道）」の真理は、左翼の全てが解って、右翼の全てが解ってこそ見えるものである。「二」はこのような両ウィング認識を目指す考え方を象徴する御旗である。自席を岩盤にボルト締め・溶着して「独善を打ち放し、都合の良いものだけを引き寄せる」偏った・片寄った一方通行の弊害を警告する意味合いを与えたものである、どんな立ち位置（自席）に居ようが、次のような考え方を修養すべしとしたものである。

- ・ 宇宙自然界の陰陽二元相対(待)性原理「陽中陰有・陰中陽有」を肝に命ずべし。
- ・ 何事も遠く離れた⁽²⁾両極・⁽²⁾対極を意識すべし。
- ・ 自席を一旦離れて対極に「行⁽¹⁾って来⁽¹⁾い」で往復・循環¹⁺¹⁼²の心・言・行を取るべし。
- ・ 半分^陰1（行き）＋半分^陽1（来る）＝通貫成就2

加えて、本通り五大に宿る不思議を醸成する崇仏敬神の心を汲み取り、以下に記述の5要件をも込めたものだ。

- ✓ 1；大日如来と阿弥陀如来の二つを一つ、一体を二体とも見做せる中に矛盾がない。
- ✓ 2；大日如来と相即不離の金胎二つを指す。
- ✓ 3；阿弥陀如来と相即不離の脇侍（観音・勢至）二つを指す。
- ✓ 4；薬師如来と相即不離の脇侍（日光・月光）二つを指す。
- ✓ 5；現世仏「仏陀」と、未来仏「弥勒菩薩」の二つを指す。

（b）実践的な面

不動明王（大日如来の化身）を本尊とする修験道においては、往復・循環の動性——「原点回帰」を踏まえた両極調和思想を重要視する観念があり、一つの「もの・こと」に固執する・執着する、一つの「もの・こと」を独善化^{しゅうれん}する片方向収斂^{へんぱ}は、偏屈・偏頗に繋がり修験道の最も忌避する処だ。自由滑脱、縦横無尽、無碍の境地を標榜する精神世界を顕現化する時の形象として往復性・循環相（行¹って来¹い・此の世→彼の世→此の世）の実践を意識する。具体的には目標点に行¹って、目標点から帰¹って来る往復山岳抖擻^{とそう}（抖擻とは心身を浄化し雑念を払い、心を集中する行）の実践である。その思想を象徴する一つとして、行きの片道（あるいは前半）を $\dot{1}$ として、帰りの片道（あるいは後半）を $\dot{1}$ とし、往復の $\dot{2}$ を以って完結・満願・結願と見做す。合わせて本通りに当てた具現化の概念は図-15のとおり。行¹って来¹いは一方向の2倍となる。往^{かえ}きを1、復^{かえ}りを1、合わせて2となる。また、凝死（死んで）・再生（生き返る）という蘇りの行であるとされる、死生と生死はそれぞれが生と死の対を表裏一体とする。

以上を包摂し、阿弥陀如来（法蔵菩薩）にちなむ『四十八誓願』を根源とし、計画・誓願の段階を前半ステージ（一＝月山）と見立てて四十八丁を当て、実践・修行の段階を後半ステージ（一＝湯殿山）と見立てて四十八丁を当て、前半と後半、計画と実践、誓願と修行は知行合一の表裏一如の通貫成就（一＋

一 = 二) を以って、結果、計『九十六』丁を当てた。加えて、前半に慈悲（観音&胎蔵界）・静寂に係る修養を当て、後半に智慧（勢至&金剛界）・活動に係る修養を当てることを以って、それらの思想を本通りに写し込んで丁石安置の大事業を成し遂げた。

前半の 1 + 後半の 1 = 完結の 2（二）である。

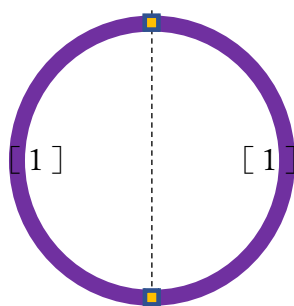
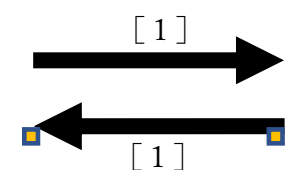


図-15a

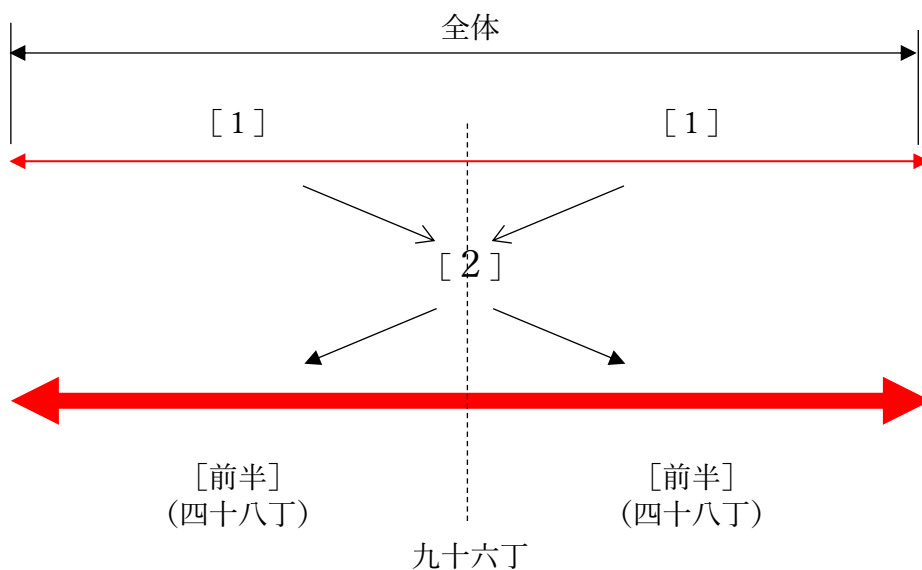


図-15b

(2) 別視点の『三十二』×『三』=『九十六』

- 『三十二』は仏陀の三十二相を指す。お釈迦様が備えていたとされる 32 の優れた外見上の身体的特徴（性質や姿形）をいう。いわば人間が理想とする究極の姿であるとも謂われる。
- 『三』は天地人三才、あるいは過去・現在・未来の時間的三世を指す。
- 合わせて乗算の意味合いは、天地人のそれぞれにおいて、時間的三世のそれぞれにおいて、仏陀が備えた理想の心身の持ち様、理想の生き方の有り様を重ねて、本通りを歩いて修行する段においての拠り所としたのでなかったのか。

(3) なお、本通りにおいては、後者よりも、前者の『四十八』×『二』=『九十六』の意味合いで、事業の意義付けを図ったことであろう。

5. 「三十六と九十六」の聖数結合・複合性

以下は推理・想像・創造である。

「36と96」の関係を探って行くと鎖交性・重層性が浮かんで来る。

(1) 図(表)-16 は前記図(表)-14 の右半分を再掲し、ゴシック文字部分を付加する。

□1；それぞれの三つの横並び数の合計は等しく「18」になるが、18の数字並びの加算は「9」（1+8）となる。

□2；数字並び横計の総数は 54 となるが、54の数字並びの加算は「9」（5+4）となる。

□3；三つの数字両端 14 と 22 の和も 36 となり、「三十六」体に等しくなった。36の数字並び「3と6」の加算は「9」となる。

数字を加算				
6	6	6	=18	1+8=9
5	6	7	=18	1+8=9
3	6	9	=18	1+8=9
14	18	22	=54	5+4=9
54				5+4=9
両端 14+22=36				3+6=9
図(表)－16				

これらは何を意味するのだろうか、ここにおいては、「三十六（3 6）」体の^{み・ろく}3 6に共通的な9が絡んで「^{み・ろく}3 6 9」となり、結局は基層に位置する「369」に戻ったということになる。また、3桁3種の数字において中央に共通する聖数6と、数字並びで共通する9（□1～3）を以って「九十六」丁に繋がって来た。とても不思議な因縁果を感じる。

(2)「善財童子の旅」とも係る。

ここに表れた「54」および10本指の1～

10までの加算値は「55」に係る発展思考である。ここで浮かぶのが華嚴經に出て来る「善財童子の旅」である。詳述は割愛するが、菩提心——悟りを得たいと発願発心し、ひたむきに努力する実践行において**55**箇所**53**人の良き師友・善友を求め本人を含めた**54**人の長い旅路の求道物語である、終盤は**弥勒・文殊・普賢**の三菩薩のところに行き本当の仏心を悟って終りとなる。童子は**弥勒菩薩から教えを乞うて目覚めた**と云われている。

「53、54、55」は平数5を共通とし、2桁溢数の^{えいすう}50を払い残った3・4・5に着目すると、ピタゴラス数基本形——前記図(表)－5の説明——に還元する。「3・4・5」の意味合いについては、前記図(表)－2・5を踏まえ、万物躍動基点「三・3」をスタートし、自然増数1を獲得して4を生み、次に陽の場を踏んで1を獲得して5を生んだという過程を表したものである。

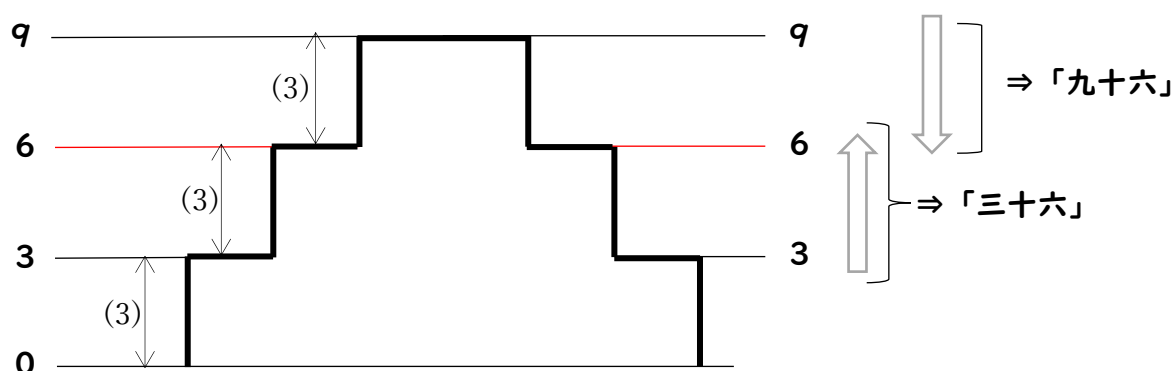
本通りはまさしく菩提心実践行の舞台であり、^{ほんみちぐどう}本道求道そのものの道である中においては、「36、96」を表の聖数とすれば、「53、54、55」は裏に流れる聖数である。

なお、2022(令和4)年11月末において、「36、53、54、55」丁の現存を確認出来ておらず残念なものの一つである。

(3)「3 6と9 6」の二つの並び数を加算・減算で整理すると図(表)－**17**のとおりになる。

- ✓基準面0をスタートし「3⇒6⇒9⇒6⇒3」と「3」刻みで昇降・循環・往復する。
- ✓「3 6」は3⇒6の昇順に、「9 6」は9⇒6の降順に数字を並べたものである、合わせて「6」に向かい中道正観化なる。
- ✓共通・循環する「^{3 6 9}3・6・9」は「^{み・ろく}みろく」に還元する。
- ✓ここに出現の「3・6・9」は、他に「5 6 7・6 6 6」がある中で基層になる一番小さな数字である。
- ✓「3 6」と「9 6」は合わせて「^{み・ろく}3 6 9」（6は二つにつき重ねて一つ）に還元する。

3 6	⇒	並び数の加算	⇒	3	+	6	=	9	
9 6	⇒	並び数の減算	⇒	9	−	6	=	3	
「3 → 6 → 9」の並びを左右反転すると				9	→	6	→	3	
「9 → 6 → 3」の並びを左右反転すると				3	→	6	→	9	
上下加算				1 2		1 2		1 2	
$3 \times 1 = 3$ 、 $3 \times 2 = 6$ 、 $3 \times 3 = 9$ 、 $3 \times 4^{\ast} = 12$									
※ なお、4（四）は易経の四象で老子の万物躍動基点三に相当する。									
図(表)－17a									



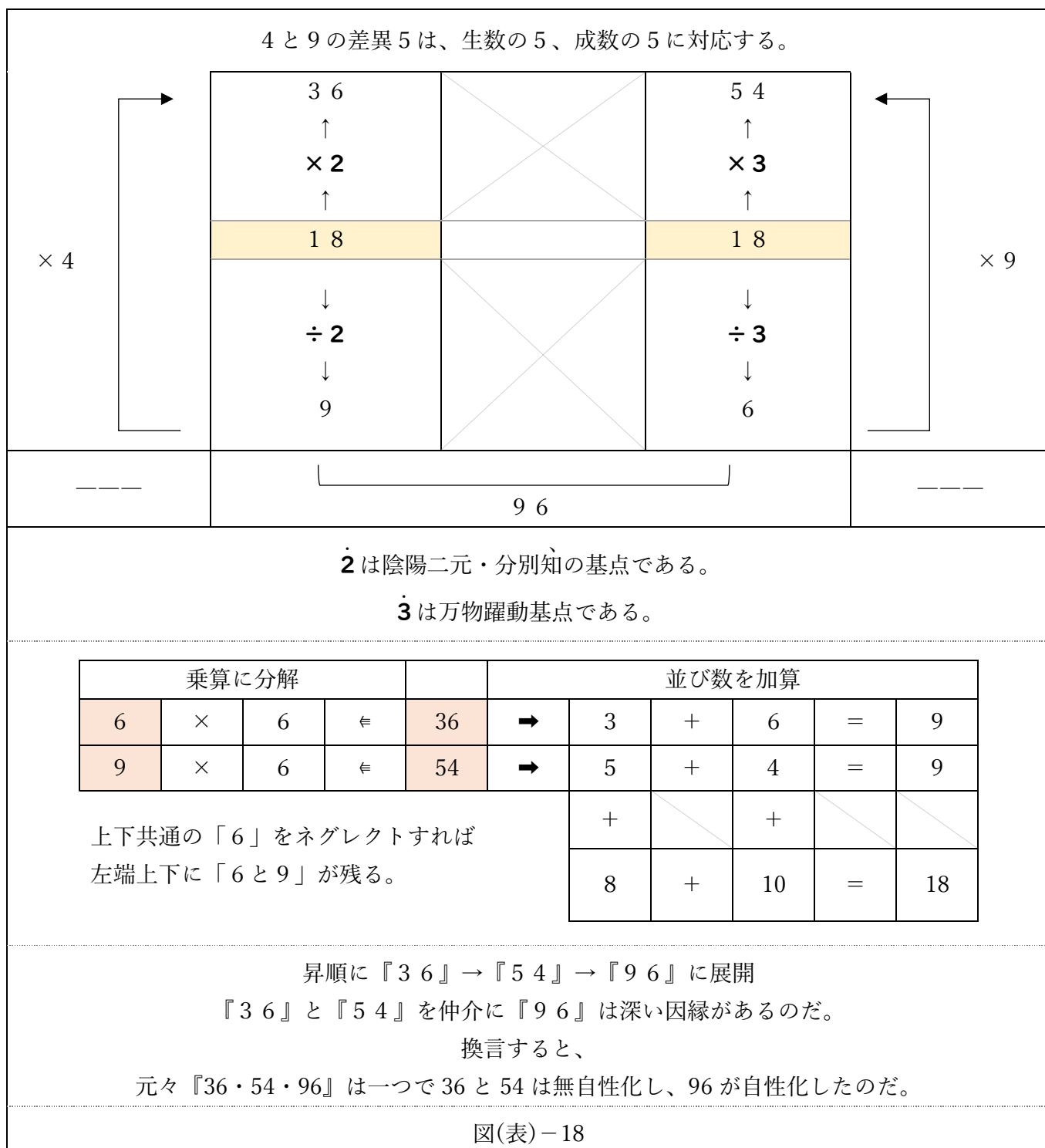
図－17b

(4) 共通の 18 を基点に「 $\dot{2}$ と $\dot{3}$ 」を以って加除操作を行うと図(表)－18のとおりとなる。

(5) 空海教主の真言密教教理の中核は「六大・四曼・三密」に要約される。あるいは、「六大・四曼・三密」の教理を以って即身成仏を説くとある。その意味する処はここではいちいち説明せず、数字のみに着目する。なお、六大は自然界構成元素の五大「地・水・火・風・空」に「意識」を加えたものの。6・4・3がキータームとなって並び変えすれば3・4・6である。金剛界曼荼羅界から見ると、6は成数の最初の数字、始めの3と終りの6（両端の3と6）を加算すると9（九）となり、金剛界曼荼羅は九つの均等に分割された九会くゑの集合で表す。ここから96を再設定出来る。

胎藏界曼荼羅から見ると、真中心におく大日如来の慈悲心が、周囲の12院に配置した仏を通して四方八方に遍満・放射するような構成を取っている。12×8=96の数値になる。

ところで、6=5+1となるから、「3・4・5(+1)」ここにも「3・4・5」が表出した。



(6) 最も単純な見方としては、金胎両部界曼陀羅は別称立体曼陀羅であるから、その教えが四方八方に遍く染み渡って行くようにいう祈りからは「四・八」で「48」となる。 48×2 (金胎の 2 値) = 96 となる。

6. まとめ

まずここで浮かぶのが華嚴経でいう「一即多・多即一」、「因陀羅網」——神々の最高位に君臨する総帥帝釈天宮にある宝網のことで、その結び目にある珠玉が互いに相映じ、映じた珠がまた映じ合って無限に映じる関係で以って、華嚴の重々無尽を説明するのである。——のことである。

秀衡公奥方の金佛三十六体の寄進奉納も、達磨寺村関係者の九十六体丁石寄進奉納も、以上の諸々の思想を具現化したもの、ち密な計算、幽微深遠な企図の賜物であると分かって来た。

本通りは、まさに複雑怪奇、不思議が満載の遠大な宇宙ドラマの縮図が刷り込まれた参詣道なのだ。

□ 1 ; 以上のことを屁理屈だ、客観的根拠の無いことだと一蹴されそうだが、当時の人達の信仰心に寄り添い、尊重する気持ちがあれば、“いや、バカにしちゃいけね！”である。

一見、語呂合わせ、辻褄合わせにも見え、奇異に感じる処を多々記述して来たが、既成概念に捉われていればそのような認識となる。これらの意図は一種の翻訳である。例えば仏典はインド等のサンスクリット語が原語であるが、中国の言語に翻訳するに当っては音訳・音写で漢訳したというのは言うまでもなく、例えば最高・完全性を意味するサンスクリット語の「パーラミターは波羅蜜」に、「ナーモは南無」に、「アミターバは阿弥陀」になったが、これらと同価同相である。

例えばもう一つ気象庁「危険度分布」の愛称を「キキクル」と称し、その語源は、「危機が来る」にある。これは立派な行政用語である。こんな例は数多無数にある。世の中の文明の進歩とは万事このようなものである。

当時の人達にはこれらはとっくに折込み済で、今は想像も出来ないようなもっと高尚、創造的な意味合いを織込んだ可能性大である。当時の人達の壮大な宇宙観が浮かんで来る。

□ 2 ; 「偶然という名の必然」と言われるが、そのとおりで、必然があつての時間的タイミング上の偶然、表は偶然、しかし、裏・真意・深意は巧妙に計算した企図・意図を込めていた、つまり、今昔を問わず、大事業実施に当っては、その実施目的・理由を明らかにするために、また、諸々のコストの必要性を説くために何らかの意義付けを図ったはずである。今様に言う想像力逞しく付加価値を与えたことだろう。

単なる思い付きとか、数の好き嫌いで決めたもので無い、表層的な観念論では無い、数理という科学的な根拠と数の持つ美しくも神秘的な性質を熟知した上での「三十六」と「九十六」の意図的・必然的な採用であった。

□ 3 ; 往古の、旧本道寺、門前宿坊、参詣行者、本通り往来人を見下してはならない、東北・関東一円から、そして日本全国から訪れた史実に鑑みては、幅広い情報交換が行われ高度な文化交流が図られたであろう。したがって、今では及びも付かない難解な神道・仏教理論を以って、本地区の価値を高め魅力アップを図ったはずである。

《 参 考 》

1. 「四十八と九十六」に係る由緒譚

修験の祭祀現場に表れる「四十八と九十六」を関連書籍より抽出する。密教・修験道の世界は陰陽二元とその調和を希求する精神世界である。生身人間の菩薩業における「^{ぎょう}行ずる」とは簡単に言うところ「^{ちゅう}中・^{くう}空」の境地を最終目標とする「心・言・行」の錬磨の実践であろう。中は中庸の中である。空は頑固な固定概念、しがらみ、執拗な執着心を解き放った自由な境地をいう。娑婆界人間の煩惱の根源は陰陽二元の分別知にある。陰陽二元の分別知界の弊害（対立・競争）を排除し、陰陽二元の分別知界の恩恵（^{うごめ}吸引・統合）を渴望する蠢きは、人間のみならず、「生命・種子」を持つ動植物の基層にある性である。

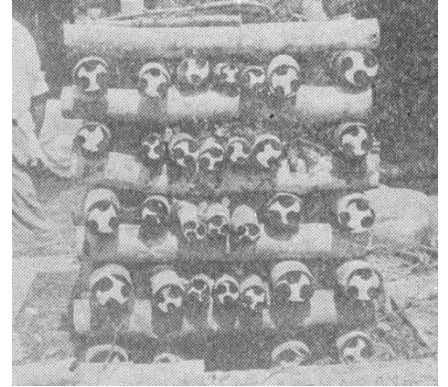


図-18

る。それらを承知の上で、陰陽二元の分別知界の対極する陰陽二元を噛み合わせて——安直に絡ませる・絡み合う、ではない——その調和（中・空）から新しい価値を生み出す智慧を欲求するものだ。それが神仏との交渉、^{かみほとけ}「行ずる」へと強く結ばれていく。文字で記述しているが、無意識層の中で培われるこれもまた性である。そんな諸々を思う中で、本書に登場した『九十六丁』の「**九十六**」に係る背景を探ってみる。

□ 1. 片山正和著「出羽三山山伏の世界」（新人物往来社）P60・P98より。「ー・・・柴灯護摩は、『三の宿』移りの時に行う儀式である。図-18参照、ブナの丸太を三尺三寸の長さに切る。前後の切り口には、墨で三つ巴のマークを書く。これらの木を壇木というが、**九十六**本つくる。壇木を井桁にして九段に積み上げる。・・・この数（九十六）は人間の骨の数と口伝されている。つまり、この^{かがり}篝火は自分自身の手で仮装、葬礼を行う逆修葬儀の意味があるのだ。同書P104-105。三鈷沢（三股沢）に向かうことになった。・・・ところどころに深い淵がある。岩場にしがみつくようにして越えてゆくのである。言い伝えによると、三鈷沢にたどり着くには、川を**四十八**回越えなくてはならぬ、という。（往復で九十六回になる。）・・・」

□ 2. 戸川安章著『修験道と民族』より。「ー・・・そのような危険を冒してまで、なぜ、三鈷沢を目指すのだろうか。「三股（鈷）沢に詣でるのは、阿弥陀如来の**四十八**願に導かれて三途の川を越え、山中の他界におもむいて静かに甦りの時を待っている精霊を迎えるためである。・・・」

□ 3. 戸川安章著「修験道と民族」（民俗民芸双書）P84より。「ー・・・毎日の初夜と後夜に山上の鐘をつく。初夜は阿弥陀如来の**四十八**願を表じて**四十八**点、後夜は百八煩惱を打ち消すことを祈るために百八鐘をついた。初夜の**四十八**点鐘は、^{ぼんもうきょう}梵網經に説くところの十重**四十八**輕戒を思え、という意味も含まれていると説く先達もいる。同書P210より。・・・**四月八日**の花の盛りははじめから、七月十四日の盛りおわりまでで、ちょうど**九十六**日になり、「年中行事」の「宝前**九拾六**ノ花器エ花備エ初ル」とあるのと符合する。・・・」

□ 4. 戸川安章著「出羽修験の修行と生活」（佼成出版社）より。「ー・・・羽黒山の夏峰は、花供の峰

と呼ばれ、ついでに四月八日は一山の総衆徒が大堂に出仕して阿迦井の水を汲み、九十六の花器に花を盛って御宝前に備え、・・・」　なお、4月8日はお釈迦様の誕生日であります。

□5. 大川廣海著「出羽三山の四季」(新人物往来社) P85 より。「・・・近世、羽黒山頂の御本社に毎朝九十六の供物と燈明が献ぜられたのは、一座につき四十八の願いをこめた二座分、すなわち、月山と羽黒山への奉仕であったと思う。このことは月山と羽黒山が二山・一体であるという信仰の原点をも物がっているのである。・・・」

□6. 柳田国男著「日の昔」(角川ソフィア文庫) P74 より。「・・・『太平記』の頃になると、京都の町の辻には四十八のかがり屋を置いたこともあって、その番兵たちが交代で火を守ると同時に、市内巡察の役目もしたので、・・・」

□7. 内藤正敏著「修験道の精神宇宙」(青弓社) P172 より。「・・・湯殿山の奥の院では、(行者・道者は) 四十八文の初穂料を納め、・・・——(筆者が追注記すれば) 祖霊・祖神の供養という点からは月山においても同様に四十八文を喜捨することから2座分で九十六文の奉仕となります。・・・」

□8. 島津弘海・北村皆雄著「修験」(新宿書房) P335 より。三股(鉦)沢は、川の流れを四十八回越えなければ、到達できないといわれる難所です。

□9. 島津弘海・北村皆雄著「修験」(新宿書房) P343 より。九字之大事・九字は、心の中の敵、外の敵、煩惱魔障、一切の禍を撃退する秘法です。

□10. 島津弘海・北村皆雄著「修験」(新宿書房) P334 より。修験者の唱え・六根清浄大祓・この日、神仏習合の大祓や祝言が唱えられます。

□11. 内藤正敏著「修験道の精神宇宙」(青弓社) P170 より。寛政時代の三山参詣の賽銭や先達料などの規定額が書かれており・・・一、湯殿山権現初穂 四十八文

□12. 湯殿山拝文(寺泉青木家文書)『長井市史』第二巻所収にある一節を取り上げるが、その中に図(表)－19のと通りの「川下四十八滝大明神」を読み上げます。

主に羽黒側修験道に関するものだが、同じ内容について言い方を変えているようである。このように湯殿側修験道にも「四十八」が出て来るのである。

阿弥陀如来四十八願は羽黒山伏が重要視したものであり、湯殿真言4か寺は無関係、と思いたくなるが、ここで取り上げた書籍の数に惑わされただてはならない。本文第20章に記述

したとおり、湯殿側においても阿弥陀如来敬拝の心は十分にあった、と理解するのが自然な姿勢である。

図(表)－19									
・	大	注	川	北	西	南	東	烏	・
・	網	連	下	方	方	方	方	川	・
・	大	掛	四	金	大	軍	降	八	・
	日	深	十	剛	威	荼	三	大	
	如	山	八	夜	徳	利	世	金	
	来	権	滝	叉	夜	夜	夜	剛	
		現	大明神	明	叉	叉	叉	虚	
				王	明	明	明	子	
					王	王	王		

2. 『六と九』に係る“まじない”

『六と九』に係る象徴的な二つの經典・祓詞を取り上げる。山々で修業を行う者が、心身を清浄するために唱える言葉集としての「^{ろっこんしょうじょう}前六根清浄^{おおほはえ}の大祓」と、錫杖の功德(除魔・除災)を説いた「^{くじょう}後九條^{しゃくじょう}錫杖經」である。手元にある御經の①真言緒經要集(密教同志研究会)、②修験行者先達勤行集(京都総本山光明寺)、ならびに、祓詞の③神道大祓全集(京都永田文昌堂)、④神拝祈念詞^{おおかみやしろ}(椿大神社)を捲って見る。今は、僧職(寺の住職)が唱えるイメージだが、前者については、冒頭四つの中で神道関係の③と

④に記載されている。一方、後者については、①と②に記載されている。たまたま、このような区分に出会ったというだけで、諸宗が入り混じった修験道や行者の必須經典においては、神仏分離以降の我々が抱く範疇ではなく、神道と仏教、混交の中で唱えたものだと考えられる。

ろっこんしょうじょう おおほらえ
(1) 六根 清 浄 の大 祓

六根とは、仏教でいう「眼（目）・耳・鼻・舌（口）・身・意」を指す。

ネットブログ「開運の神様」より拝借・引用する。

.....

あまてらします すめおおかみ のたま
天 照 皇 太 神 の 宣 は く
ひと すなわ あめ した みたまもの
人 は 則 ち 天 が 下 の 神 物 な り
すべか しずま こと つかさど ところ
須 ら く 静 る 謐 を 掌 る 心 は
すなわち かみ かみ もと あるじ
則 神 と 明 と の 本 の 主 た り
わがたましい いた なか こ 仰え
心 神 を 傷 ま し る こ と 莫 れ 是 の 故 に
め もろもろ ふじょう み ところ もろもろ ふじょう み
目 に 諸 の 不 浄 を 見 て 心 に 諸 の 不 浄 を 見 ず
みみ もろもろ ふじょう き ところ もろもろ ふじょう き
耳 に 諸 の 不 浄 を 聞 き て 心 に 諸 の 不 浄 を 聞 か ず
はな もろもろ ふじょう か ところ もろもろ ふじょう か
鼻 に 諸 の 不 浄 を 嗅 ぎ て 心 に 諸 の 不 浄 を 嗅 が ず
くち もろもろ ふじょう いい ところ もろもろ ふじょう い
口 に 諸 の 不 浄 を 言 て 心 に 諸 の 不 浄 を 言 わ ず
み もろもろ ふじょう ふ ところ もろもろ ふじょう ふ
身 に 諸 の 不 浄 を 触 れ て 心 に 諸 の 不 浄 を 触 れ ず
ところ もろもろ ふじょう おもい ところ もろもろ ふじょう おも
意 に 諸 の 不 浄 を 思 て 心 に 諸 の 不 浄 を 想 は ず
こ と き きよ いさぎよ こと
此 の 時 に 清 く 潔 き 偈 あ り
もろもろ のり かげ かたち ごと きよ きよ
諸 の 法 は 影 と 像 の 如 し 清 く 潔 け れ ば
かり けが な こと と う
仮 に も 穢 る る こ と 無 し 説 を 取 ら ば 得 べ か ら ず
みなはな この み な わが み すなわ ろっこんしょうじょう
皆 花 より ぞ 木 実 と は 生 る 我 が 身 は 則 ち 六 根 清 浄 な り
ろっこんしょうじょう 仰え ごぞう しんくんあんねい
六 根 清 浄 な る が 故 に 五 臓 の 神 君 安 寧 な り
ごぞう しんくんあんねい 仰え てん ち かみ どうこん
五 臓 の 神 君 安 寧 な る が 故 に 天 地 の 神 と 同 根 な り
てん ち かみ どうこん 仰え ばんぶつ れい どうたい
天 地 の 神 と 同 根 な る が 故 に 万 物 の 霊 と 同 体 な り
ばんぶつ れい どうたい 仰え
万 物 の 霊 と 同 体 な る が 故 に
な ところ ねがい じょうじゅ い
為 す 所 の 願 と し て 成 就 せ ず と 謂 ふ こ と な し
む じょうれいほう しんどう か じ
無 上 靈 宝 神 道 加 持

（２）九條錫杖經

錫護摩祈禱、加持祈禱、大般若祈願、地鎮祭、交通安全祈願その他お払いで唱えられる。以下はネットサイト「福聚講」より拝借・引用する。

実際には、エキス（部分）を読み上げているようである。

（第一平等施会条）

手執錫杖 しゅじしゃくじょう
當願衆生 とうがんしゅじょう
設大施会 セツだいせえ
示如実道 じにょうじつどう
供養三宝 くようさんぼう
設大施会 セツだいせえ
示如実道 じにょうじつどう
供養三宝 くようさんぼう

（第二信發願条）

以清浄心 いしょうじょうしん
供養三宝 くようさんぼう
発清浄心 ほっしょうじょうしん
供養三宝 くようさんぼう
願清浄心 がんしょうじょうしん
供養三宝 くようさんぼう

（第三六道智識条）

當願衆生 とうがんしゅじょう
作天人師 さてんにんしん
虚空満願 こうくまんがん
度苦衆生 どくしゅじょう
法界圍繞 ほうかいにょう
供養三宝 くようさんぼう
値遇諸仏 ちぐしょうぶつ
速證菩提 そくしょうぼだい

（第四三諦修習条）

當願衆生 とうがんしゅじょう
真諦修習 しんたいしゅうじゅう
大慈大悲 だいじだいひ
一切衆生 いっさいしゅじょう
俗諦修習 ぞくたいしゅうじゅう
大慈大悲 だいじだいひ
一切衆生 いっさいしゅじょう

一乗修習 いちじょうしゅうじゅう
大慈大悲 だいじだいひ
一切衆生 いっさいしゅじょう
恭敬供養 くぎょうくよう
佛寶法寶 ぶつぼうほうぼう
僧宝一體三寶 そうぼういったいさんぼう

（第五六道化生条）

當願衆生 とうがんしゅじょう
檀波羅蜜 だんばらみつ
大慈大悲 だいじだいひ
一切衆生 いっさいしゅじょう
尸羅波羅蜜 しりやはらみつ
大慈大悲 だいじだいひ
一切衆生 いっさいしゅじょう
セン提波羅蜜 せんだいはらみつ
大慈大悲 だいじだいひ
一切衆生 いっさいしゅじょう
毘梨耶波羅蜜 びりやはらみつ
大慈大悲 だいじだいひ
一切衆生 いっさいしゅじょう
禪那波羅蜜 ぜんなはらみつ
大慈大悲 だいじだいひ
一切衆生 いっさいしゅじょう
般若波羅蜜 はんにゃはらみつ
大慈大悲 だいじだいひ
一切衆生 いっさいしゅじょう

（第六捨惡持善条）

當願衆生 とうがんしゅじょう
十方一切 じつぼういっせい
無量衆生 むりょうしゅじょう
聞錫杖聲 もうしゃくじょうしょう
懈怠者精進 けだいしゃしょうじん
破戒者持戒 はかいしゃじかい
不信者令信 ふしんじやりょうしん

慳貪者布施 けんどんしゃふせ
瞋恚者慈悲 しんにんしゃじひ
愚痴者智慧 ぐちしゃちえ
驕慢者恭敬 きょうまんしゃくぎょう
放逸者攝心 ほういつつしゃしょうしん
具修万行 ぐしゅまんぎょう
速證菩提 そくしょうぼだい

(第七邪類遠離条)

當願衆生 とうがんしゅじょう
十方一切 じっぽういっせい
邪魔外道 じゃまげどう
魍魎鬼神 もうりょうきしん
毒獸毒龍 どくじゅうどくりゅう
毒蟲之類 どくちゅうしるい
聞錫杖聲 もんしゃくじょうしょう
催伏毒害 さいぶくどくがい
發菩提心 ほつぼだいしん
具修万行 ぐしゅまんぎょう
速證菩提 そくしょうぼだい

(第八三道消滅条)

當願衆生 とうがんしゅじょう
十方一切 じっぽういっさい
地獄餓鬼畜生 じごくがきちくしょう
八難之處 はつなんししょ
受苦衆生 じゅくしゅじょう
聞錫杖聲 もんしゃくじょうしょう
速得解脱 そくとくげだつ
或癰二障 わくちにしょう
百八煩惱 ひゃくはつぼんのう
發菩提心 ほつぼだいしん
具修万行 ぐしゅまんぎょう
速證菩提 そくしょうぼだい

(第九回向發願条)

過去諸佛 かーこしよぶつ
執持錫杖 しゅうじしゃくじょう
已成仏 いじょうぶつ
現在諸佛 げんざーいしよぶつ
執持錫杖 しゅうじしゃくじょう
現成仏 げんじょうぶつ

未來諸佛 みらいしよぶつ
執持錫杖 しゅうじしゃくじょう
當成仏 とうじょうぶつ
故我稽首 こがけいしゅ
執持錫杖 しつじしゃくじょう
供養三寶 くようさんぼう
故我稽首 こがけいしゅ
執持錫杖 しつじしゃくじょう
供養三寶 くようさんぼう

南無恭敬供養 なーむくぎょうくよう
三尊界会 さんぞんかいてー

恭敬供養 くーぎょうくよう
頭蜜聖教 けんみつしょうぎょう
哀愍摂受 あいみんしょうじゅ
護持弟子 ごーじでし

(end)